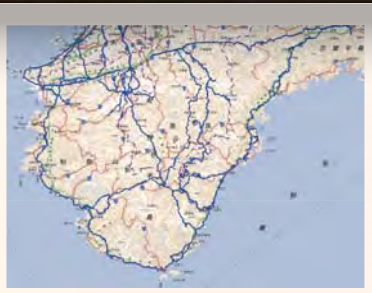
熊野の森から

怪しの熊野

其の四「古道の怪（その1）」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授



筆者ら和歌山大学の研究者で進めている紀伊半島の古道、街道マップ（地理院Web地図を改変）。未記載もある未完成品だが、スマートフォンで読み込める和歌山県内の古道や街道のデジタルマップがどこからも公開されておらず、やむを得ず作成に着手した。三重県、奈良県では、行政から公開されている。

今、熊野古道の世界遺産への追加登録が話題となっている。7月に登録される見込みだったハズが、少なくとも10月にまで延期されることとなり、がっかりしている方もおみえになることだろう。熊野古道というと、宗教を基盤においた参詣道であるというのが一般的な理解だが、ルートによっては生活道にも物流にも使われていた。

世界遺産である熊野古道にも「妖怪が棲（す）んでいた」と言うと、一部の方から叱られることは少なくなかったが、それでも調べてみると何種類かの妖怪の存在が浮かび上がってくる。代表的なものは、古道で行き倒れた亡者が人に取り憑（つ）いて著しい空腹感を与え、自分の道連れにするかのように人を行き倒れさす「ダル（ガキ）」、寂しい峠道にいきなり出没して浮かれ踊る「踊り坊主」や、狼にまつわる怪異の話などである。古道以外の山道には、人を取って喰（く）うこともある怪物「ヒトツダタラ（一本足）」、女の姿で油断させて男を襲う「肉吸い」、山に棲む河童「カシャンボ」、山頂で出くわす「天狗」、さまざまな怪異の話が伝わっている。いずれも、既に本コラムで紹介したものばかりだが、妖怪が出没する、した、ということは、少なくとも古道や山道での往来が途絶えた時期があったことが想像される。人々の往来が盛んならば、妖怪も道にまで出てきにくくなるからだ。

熊野古道のシンボルとなっている那智勝浦町の大門坂。苔むした雰囲気が本来の姿だとの意見がある一方で、往来が盛んだった時代には苔など生えてなかったという証言もある。

世界遺産の追加登録を目前に、今の古道がどうなっているのかの話題が報道されるようになっている。追加登録に対する喜びや期待への報道がある一方で、ネガティブな報道も少なくはない。例えば、那智勝浦町の大門坂では歩く人が多過ぎて苔（こけ）が剥（は）がれてしまったとか、近年の開発工事によってルートがダメージを受けているとか、せっかくの荘厳な雰囲気を台無しにするかのような集客施設の建設の話題、宗教的な意味合いの拡大解釈のようなセラピーやスピリチュアル観光振興への苦言などだ。これらネガティブな報道に対しては、賛同する人も、心を痛める人も、古道の持つ意味や観光振興の立場から反感を持つ人もいる。いずれの意見にも一理があり、筆者は、熊野古道の未来を考える議論のきっかけになればと考える。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。